

「へビオトープ」を守る 「人・モノ・こと」を知る

—— ビオトープKBS

取材・レポート：『めづるくらし』研究会 編集部

〈へビオトープ〉は、地域固有の自然生態系を守ることに。「ある生物を保護するとしても、その生物の採取を規制するだけではダメ。その餌となる生物や繁殖地、さらに餌となる生物や植物など、自然生態系全体を維持することが必要」という考えから、日本では1990年代から〈へビオトープ〉の概念が導入された。「2008年6月10日、自然発生的に発足した活動です。」と語る、軽井沢・借宿「ビオトープKBS」代表の小林敦氏。「ビオトープKBS」では、休耕田を再生。4月から5月には古代米を植え、自生する野ハラアザミやツワブキなどの吸蜜植物の株分けや植栽。6月から7月には、ルバーブやラズベリー、ブルーベリーの収穫からのジャム作り。9月から10月には、旅をする蝶アサギマダラが多く飛来し、「蝶舞う夢街道」が開通する。10月以降は、稲刈りと収穫祭。枯れ草刈りや、春からの作業に向けての畑の整備などに追われる。

軽井沢町の小学生探検隊トムソーヤクラブや、関東近郊の子どもたちのために、草原や水田、畑と敷地全体を開放。自然観察や収穫などの、体験の場としても活用。

懐かしい田園風景と、生き物に出会える光景。自然も、守る人も、休むことなく時間が流れていく。

信州・軽井沢「ビオトープKBS」
Shinshu Karuizawa Biotope Station KBS
軽井沢の西地区・借宿を中心に、生き物たちの命を育むためのビオトープを作っている、地域の住民グループ。
浅間山麓に広がる自然の中で、当地に保存されていた貴重種を始め、生息する生き物を増やし続けている。
<http://blog.livedoor.jp/biokbs/>



旅をする蝶・アサギマダラ。前翅長40～60ミリ。数千kmもの距離を旅するアサギマダラの飛来経路など移動状況調査のため、蝶の翅にマーキングを施してある。



子どもたちに開放して、作業を手助けしたり、遊びながらの自然の中の教育の場としても活かされている。植えてあるラズベリーやルバーブなど、多くの作物の姿も見て、知ることができる。



浅間山の裾野、広大な空間での楽しい作業。



ベランダや庭でも可能な 〈ミニ・ビオトープ〉

大きめの水鉢、水槽などに、ホテイアオイやカモンバ、スイレンなどの水生植物を植える。メダカやタナゴ、ヌマエビ、タニシ、イシガイなどを放つだけ。飼料を与えず、ビオトープ内の生態系だけで生活できる環境は、観察もでき、ずっと見ても飽きない小さな自然となる。